

外部講師派遣事業を活用した「心身症の子どもたちを考える会」の実践

平成28年7月28日 鳥取県立武道館
事務局 米子市立米子養護学校

1 研修テーマ 心身症等の児童生徒への支援のあり方～場面緘黙を視点にして～

2 アドバイザー かんもくネット代表 角田 圭子 先生

3 テーマ設定の理由

本会はこれまで心身症等の児童生徒への実態把握の仕方や支援のあり方について研修を重ねてきた。近年各校は、不登校児童生徒の減少を目指し取り組んでいるが、依然、不登校・不登校傾向の児童生徒はいる。そこで今年度は、不安な気持ちを抱え、コミュニケーションが取りにくい、集団に入りにくい、行事への参加が苦手であるといった児童生徒の中の「場面緘黙」を視点にして、事例を挙げながら、児童生徒の居場所づくりと学校生活への参加のためのアプローチについて研修を深めていくことにした。小・中・高・特別支援学校の教職員との協議を交え、アドバイザーの指導助言を得ることで、教職員の指導力向上をめざしたいと考えた。

4 取り組みの実際

本会では、県内の特別支援学校、西部地区の小中学校・高等学校等に広く呼びかけ、年に1回公開事例研究会を開催している。今年度はかんもくネット代表・角田圭子先生に講師をお願いし、本校転入システムの紹介、本校生徒の事例説明の後、事例に対しての助言・講演等をしていただいた。

(1) 本校の事例について

今年度の事例は、本校に在籍する場面緘黙の症状が見られる生徒を挙げた。これまでの本人の様子、保護者からの聞き取り、前籍の小学校からの情報、医療歴等をもとに、学校における支援について話し合い、学校全体で本人とかかわり、安定した気持ちで登校できるようになった事例である。その際心がけた、症状改善に向けた5つの支援を挙げていった。家庭との連携、意思表示の仕方の工夫、不安や緊張を和らげる、好きなことに取り組み自信を持たせる、人とかかわりを深めるといった支援である。特に大きく変容が見られたのは、バドミントンとの出会いである。発揮する場があり、他者に認められたことが自信につながったと思われる。また、受容的なかかわりを、教職員はもちろん、友達もしており、ありのままの自分が受け入れられているという安心感につながっている。その後段階に応じて目標や課題を提示し、挑戦への一歩につなげたり、十分な話し合いで妥協点を見出し、意欲的取り組んだりすること、達成感や充実感のもてる取り組みで自信を回復させ、将来への自立へとつながっていくと考える。

(2) 講師から事例についての指導助言

本事例は、小学校低学年では特定の友達と少し話せ、音読など台詞のあるものはクラスで発表できていたが、小4時から小学校卒業まで不登校となった中3女子の事例である。文章構成力や、部分の関係を推しはかり全体を把握する力の弱さがあり、症状の背景として発達の問題を有することが推測された。自我が芽生え、友達関係が複雑化する小学校中高学年の時期に、鬱や不登校などの二次的な

問題が生じやすい。本児もそのような複合的な問題を有する場面緘黙のケースに当たると考えられた。家族以外や家庭外で話せる場面が非常に少ないため、発話ではなく、動作でのコミュニケーションを目標にするのがよい。中学校ではこの部分への効果的支援があり、成長へとつながっている。行事前の見通しを示したり、困った時のサインを打ち合わせしたりするなど、普段から取り組むことが大切である。体を動かすことは緊張をほぐす。バトミントンは本児にとって一生の財産になるだろう。課題としては、気持ちの表現は高度なため、パターンがある事務的なことをメールや筆談できるようにすることがあげられる。

(3) 講演「場面緘黙への理解と支援～不安や緊張が高い子どもたち」

「緘黙」とは、緊張→黙る→安心というサイクルが身についてしまっている状態である。「話さない」ことで、緊張場面での不安の高まりを「回避」している。もともと緊張しやすい行動抑制的気質を持つことが多い。親自身も子どもと同じ傾向をもち、問題から「回避」しようとする傾向があるので、問題意識が持ちにくいことがある。そのため、まずは親に「場面緘黙」ということを知らせ、理解を促すことが大切である。

場面緘黙の子どもは、少人数で、することが明確で流れが決まっている方が安心できる。クラスへの啓発は、本人の了承を取ってから行う。本人は目立つことが怖いので、自分のことを話されるのは大きなストレスになる。本人にとって大きな挑戦だが、治療的である。また、いじめの予防になる。

クラスでの支援としては以下のことを行うのがよい。

① 目立たない支援

例えば意見を言う時に付箋を使う。注意することは、本人だけでなく、クラス全員にさせること。

② 不安の少ない環境づくり

行事など緊張が高い場面では、例えば何か手に持ったり、立ち位置を工夫したりするなど配慮することで安心できる。自分の顔が隠れるような衝立を使ったこともよかった。

③ 話せる場所を増やすための段階的な練習

家庭が1番安心し、教室が1番緊張する。安心できる場所から、少しずつ緊張する場所でも話せるようにしていく行動療法的なアプローチが最も効果的と言われている。

④ 本人への言葉かけ

場面緘黙は自分の性格ではなく、症状であり、取り去ることができるものであることを伝える。本人への症状の説明は「病気」と言うより、「症状」「くせ」と言った方がよい。

5 今後の展望

外部講師を招いて公開研修会を開くことで、場面緘黙の子どもたちへの理解を深め、支援方法について研修を深めることができた。児童生徒一人ひとりの実態に合わせ、自立に向けた取り組みをしていくことが本校の役割であると考え、今後も校内研修のあり方、保護者との連携、関係機関とのネットワークづくりなどの体制を整えながら、適切な支援を行っていかなくてはならないと感じた。本会での事例発表や講演会の設定も本校の他校にできる支援の一つとして、これからも続けていきたい。

